＜「日本剣道形」＞ Part②

1 実施上の留意事項

(1) 打太刀と仕太刀は、師弟関係にあり、総ての動作は師に従う。(本体と影)

(2) 太刀の形には、「機を見て」と打突の機会が示されてある。

(3) 機とは、「間合いに接したとき」とされているが、これは師に従って進み出て「仕太刀の左（右）足」が調った瞬間をいう。(よろしいか？・・・行きますよ！)

(4) 小太刀の形には、「入り身になろうとするところ」とあるが、これは「入り身」にさせるのではなく、「そのはな」を打ち込むという意味である。

(5) 相手に悟られるような息づかいではいけない。立会の間合いに復するまでを一息で行うことにより、呼吸法を学ぶことができる。

(6) 相手から目が離れるのは、唯一、太刀の形七本目、打太刀が歩み足で正面を打ち込む瞬間だけである。

2 ワンポイント （◎～太刀の形）（○～小太刀の形）

◎ **一本目**～仕太刀の柄もろとも臍まで切り落とす。打太刀はその後前傾となる。

◎ **二本目**～打ち下ろす小手は、剣先を水平よりやや下まで下げる。形に表さない残心。

◎ **三本目**～互角の相中段から、仕太刀は鎬を使って入れ突きに萎やし、突き返す。打太刀も鎬で押さえるが、一切の打ち突きなしに仕太刀の位詰めにより、勝負となる。
※ 「位詰」とは優位な体勢を整え充実した気勢で相手を攻めることをいう

◎ **四本目**～本来大きな足使いのできる構えではない。互角に切り結ぶ刀は肩の高さで交差し、その後、相中段、打太刀の突くはなを捲き返して勝負となる。

◎ **五本目**～一本目と異なり、打太刀は顎まで切り落とす。仕太刀は、左鎬で擦り上げ正面を打ち、一歩退いて残心。

◎ **六本目**～「美の表現」と言われる形。仕太刀の終始途切れない気勢に押され勝負となる。

◎ **七本目**～気当たりで突き（物打ちは肩の高さで交差）相手の反応を見る。互角の相中段から。大技の打ち下ろしを胴に抜く。唯一、打太刀は仕太刀から目を離す。

○ **一本目**～仕太刀の構えた剣先は顔の中心。打太刀は顎の高さまで切り落とす。仕太刀は、右に開いて受け流し、正面を打つ。

○ **二本目**～仕太刀の剣先は胸部。仕太刀は、打太刀が上げようとする刀を制す。打太刀の引きに乗じて入り身。打太刀が脇構えから上段に変化して打つ面を仕太刀は左に開いて受け流し、正面を打つ。

○ **三本目**～仕太刀は剣先を下に。打ち込む面をすり上げ、すり落とし、胴をすり流し、すり込む。小太刀の鍔で打太刀の太刀を直角に押さえ、左手を添えて入り身になる。